

ひと

なかむら
中村てつ
哲氏

ベシヤワール会現地代表

的にやってきて自分たちの価値観を押しつけてしまうこ

パキスタン北西部の辺境州ベシヤワール。隣国アフガニスタンとの間を往き来しつつ、中村さんがここで医療活動を続けて約二〇年が経つ。

数ある国際援助団体が撤退や失敗を重ねる中、現地の

人々から厚い信頼を得ているのが、中村さんたちのベシヤワール会医療サービス(PMS)である。

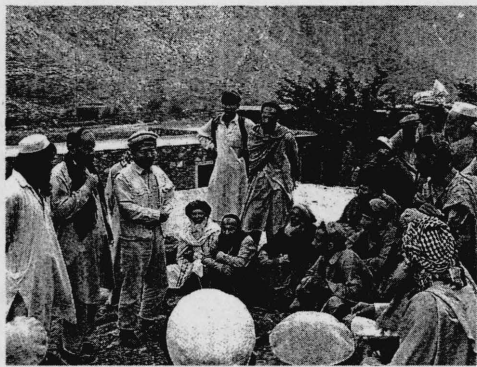
「信頼されるにはその住民になりきってしまうことです。そうすれば自然に協力してくれますね。一時

とが、多くの失敗の背景にあります」。アフガン人も自分たちと同様、独自の文化や習慣を持った生身の人間。それを無視した活動は「援助という名の介入ではない」と指摘する。

かの地に関わるようになったきっかけは、昭和五十三年にパキスタンの霊峰テリチ・ミールへの遠征隊に参加したこと。その後、日本キリスト教海外医療協力会(JOCS)から、ベシヤワールでハンセン病治療に携わる医師を探してい

ると相談され、「あそこは行ったことがある」と引き受けたのが始まり。五十九年五月に赴任するものの、現地のニーズにより即した医療を―とJOCSから独立。医療を受けることができずにいた人々を前に、「ここで退いたら男がすたる」と活動を続けてきた。

現在、ベシヤワールに基地病院と一診療所、アフガニスタン側に三診療所を持つ。日本人を含め百数十名のスタッフが年間約二〇万人の診療に当たっている。



基地病院の建設について現地の人々と話し合う中村氏(左から3人目)。

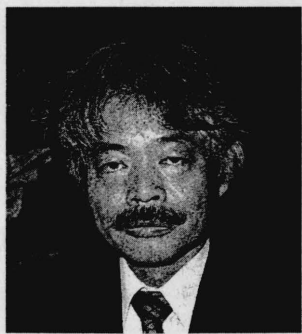
近年の大干ばつで砂漠化した土地を緑に蘇らせるプロジェクトだ。「食料を生産しないと病気はなくなりません。一見バラバラなようですが、医療、水、農業はつながっているんですね。日本にいるのは一年のう

した喧騒に倦むことはない。訥々と、そして時にユ一モアを感じさせる語り口でアフガニスタンの実情を説き続けている。

「アフガンの人々は日本に対して非常に親近感を持っています。その理由は日露戦争に勝ったこと、そしてヒロシマ、ナガサキを経験したこと。私たちの活動も、日本人であることでいかに助けられたか」。

しかし最近、現地の車両に描いていた日の丸を安全のため消した。「復興支援」の名の下に日本が欧米と歩調を合わせていることに批判が強まっているからだ。

アフガニスタンは依然復興が進まず、最悪の情勢にある。イラクも混迷を深める中、一つの「正義」で律しようとすることの危うさを痛感する。そして広がる干ばつ。「世界的な破局の始まりという気がします」と語る中村さん。長年にわたり現地の事情を知るだけに、その言葉は重い。



出神は福岡県出身。昭和21年生まれ、福岡県出身。48年九大卒。専門は経内科、脳外科。59年5月にベシヤワール州に赴任、アフガンでの医療活動に携わる。今年8月にマグサイサイ賞。平和国際理解部門受賞。ベシヤワール会(本部=福岡市、会員数約1万2,000人)は中村氏を支える民間団体。

多い疾患はやはり感染症。特に、不衛生な水を飲んで下痢を起こし、簡単に死んでいく子どもたちがいる。「病気は後で治すから、とにかく生きておれ」と、これまでに掘った井戸は一〇〇〇を超える。大規模灌漑水路も建設中。これは

ち四カ月ほど。その間は脳神経外科馬場病院(福岡県広川町)で副院長として勤務、家族七人を扶養する。加えて、講演で全国を駆け回る。会場は常に満員となり、終われば聴衆から握手せぬに遭う日々。しかし、中村さんはそう